

七賢人再考

北
畠
知
量

もくじ

はじめに

I 七賢人とその時代

II 知の表現

III 価値超越の知

結語

はじめに

この小論は、古代ギリシャの七賢人がどのような知の持主であったかについて論じたものである。

(1) 七賢人とその時代

前六世紀のはじめ頃に、七賢人と呼ばれる人々がギリシャ諸国で活躍した。

彼等に関する最古の文献資料とされている『プロタゴラス』（三四三）には七賢人のメンバーとして、タレス、ピタコス、ビアス、ソロン、クレオブウロス、ミュソン、キロンの名があげられている。同書が執筆されたのは、前四世紀初頭の頃であり、それ以後、数百年にわたって多くの人々が彼等に関する様々な伝承を記録し続けた。そして三世紀初期に『哲学者伝』を書いたディオゲネス・ラエルティオスは、ミュソンのかわりにペリアンドロスの名をあげてこれらを七賢人とし、更に追加するならばアナカルシス、ミュソン、ペレキュデス、エピメニデスの名があげられると指摘した上で、七賢人全員に関する総合的なエピソードをまとめ上げたのである。

これらの資料に描かれた七賢人とは、一体どのような人物だったであろうか。

タレス（ミレトス出身）は、常に賢者の筆頭に数えられている。彼は政治活動にたずさわった後で自然の研究に

従事した。リュディアの王クロイソスがミレトス市に同盟を申し入れたとき、彼はすぐれた勧告をしてそれを断わるようにさせた。だがヘラクレイデスの対話篇の中では、タレス自身「国事から超然とし、世捨人としてひとり孤独に暮らした」と告白している。自然の研究に関しては、「万物の根源は水である」としたこと、日食を予言したこと、魂の不死を証明したこと、オリブの豊作を予測し投機で富を得たことなどが知られている。

ピタコス（ミュティレネ出身のアイオリス人）は、レスボス島の僭主メランクロスを倒して支配者の地位につき、貴族と平民との調停者として活躍した。彼は国政を秩序あるものにし、ミュティレネの人々にたいへん尊敬されたが、前五七〇年、七〇才を越えた高齢で亡くなった。墓碑に「好機を知れ」という格言が記された。

ピアス（プリエネ出身のイオニア人）は政策の提案者として、また訴訟の弁護に長じていたことで有名であった。祖国イオニアの繁栄を願って二百行に上る詩を残した。その内容は今日に伝わらないけれども、他の格言から察すると、実務的な示唆に富んだものであったと思われる。ある依頼人のために弁護演説をした後、孫の胸の中で息絶えた。国家は彼を盛大に葬ったと伝えられている。

ソロン（サラミス出身）は、貧富両階級の間にとって両者の利害の調停者として活躍した。彼の最大の業績は、生地サラミスの領有をめぐるアテナイとメガラの戦いに関わり、アテナイ側を助けたことであろう。その他に、執政官^{アルゴン}に選ばれて一連の法律を制定したこと、公私にわたる債務切り棄ての実施、財産評価政治の導入などがよく知られている。伝えられている格言も多いが、最も有名なものは、クロイソスとの会見の際に発せられた「人生は終末を見なければいけない」という格言であろう。その史実性は疑わしいが、ディオゲネス・ラエルティオスもプ

ルタークも、これがソロンにふさわしいと見なして紹介している。

クレオブウロス（リンドス人）は僭主であり詩人でもあった。彼は体力でも美しさでも人よりすぐれており、エジプトの哲学にも通じていた。彼には詩人の娘がいたが、そのためか少女達の教育の必要性を認めていた。七〇才の高齢で死に、墓には「適度^{イクコン}が最善」という格言が刻まれたと伝えられている。

キロン（ラケダイモン人）は民選^{エポロス}長官として活躍したが、言葉数の少ない人であった。「口を慎むこと、宴会の場ではなおさらにそうするように。」という訓誡が残されている。また彼は「未来のことを推理によって捉えらるるかぎり予見するのが男子の徳である」と言っていた。息子がボクシング競技でオリンピック大会の勝者となり、これを喜びすぎて死んだと伝えられている。

ペリアンドロス（コリントス人）は優秀な僭主として四十年の長きにわたりコリントスを統治した。彼は奴隷を禁止して農民の保護につとめるとともに、他国の僭主と友好関係を保ち、海上貿易に力をいれ、祭礼を盛大に行なって国威を高揚させた。晩年になって昔勤当した息子に僭主の他位をつがせようとしたがはたせず、これに落胆して八十才で死んだ。

このように、賢人達は、様々な性格をもったバラエティに富む人々であり、活躍の分野も出身地もそれぞれ異なっている。共通しているのは、彼らが実在の人物であるということと、彼らが活躍した時代（七賢人の時代）が、いずれも六世紀初頭（第四八〇―五八五年）のわずか三年間に限定されているという点である。それではこの時代に時を同じくしてこれらの賢人達が登場してきたのは一体どうしてであろうか。

この問題を考える場合には、前七世紀末から前六世紀の間にギリシャ諸国がどのような状態に置かれていたかをまず念頭においておかねばならない。

この時代は、貴族的な社会制度を支えていた諸要素が大きく変化した時代であった。七世紀のはじめ頃より、人口増加を解消するために始められた大規模な植民運動によって、植民市と母市との間の交易が盛んになってきた。地中海沿岸に点在する町で、かつてギリシャの植民市であったものは百以上も数えられるが、これらの植民市から母市へは穀物・魚類、金属、羊毛、木材、奴隷が運ばれ、逆に母市からは、酒、オリーブ油、工業製品等が送られた。このような交易活動の発展により、地主的な旧貴族のある者は商人貴族へと変貌したし、またある者は金銭万能の世を嘆きながら没落していった。社会階層全体に大きな変化が生まれたのである。ソロンは次のようにうたっている。

多くの下賤の者が富み、多くの高貴の者が貧しい。しかし私は、アレテーを富と替えようとは思わない。
アレテーは持続するものだし、富はあるときにはこの人に、またあるときにはあの人に帰属するものだから⁽¹⁾

商業交易活動は貨幣の流通を促した。そして貨幣は、今や生活のすみずみにまではいりこんできた。市民達の経済生活のレベルは向上し、自費で武具を調達出来るようになってきた。貿易の発展が、より安価な金属（武具の原料）を市場にもたらしたからである。このことによって、かつては貴族につき従い、一対一で戦った人々は、今や密集隊列を組み、集団の戦闘をするようになった。勿論この変化は、一騎打ちこそが誉れであると考えてきた貴族

の地位を相対的に低下させる結果となった。これらのすべてが、従来の貴族制度の矛盾を一層あらわなものとする役割をはたしたのである。特にアッティカでは、貴族間の軋轢と債務奴隸化した下層民の経済要求とが重なりあって深刻な階級対立が生み出されていた。

このような時代に活躍した賢人達は、何よりもまず政治手腕という点で期待と注目を集めた人々であった。先に見た七賢人はいずれも何らかの形で政治と深くかかわっている。彼らのほとんどは一定以上の身分・家柄の者であり政治の分野で手腕を発揮しやすかったのであろう。彼らは世襲的な政治権力によらず、党派に属することもなく、個人の才能あるいは弁説などによって国内の政治的対立を調停し、条約の締結に手腕を発揮して各都市国家間の政治的経済的危機を乗り切ったか、あるいは少なくとも支配者に助言を与えたが故に賢人と称されるようになったのである。^{*}

※この点に関しては、ジャン・ポール・デュモン、有田潤訳『ギリシャ哲学』所収の「まえがき」白水社に負っている。同書の「まえがき」で有田潤は、W・シュミットの見解を引きつつ、次のように述べている。すなわち七賢人を出身地別にみると、イオニア人二人、ドリス人一人、アイオリス人一人、アテナイ人一人、リンドス人一人、コリントス人一人であり、これは古典期以前の各地の文化水準を反映していて、割当ては「公平」である。だが、七賢人伝承がデルポイの協力のもとに作り出されたのだとすると、この「公平」さの中に、デルポイ神官団の政治的配慮を読みとっていいのかもしれない。Cf. W.Schmid, *Geschichte der griechischen Literatur*, I, I, S.371

賢人達はこのような時代に活躍したが、この時代の状況に対する彼らの対応の仕方は、必ずしも今日の我々が考

えるような實際的で合理的な性質のものだけではなかった。

古代ギリシャ人は――おそらく他の古代人達でもないのだが――神秘的・宗教的な觀念ときわめて親しい間柄であった。彼等にとって、あらゆる現象は、何等かの形で神秘的・宗教的意味を帯びていた。自然現象と宗教（神々）とはきわめて密接な關係にあつたし、国政上の重要問題の決定には神託をうかがうことが常識とされていた。国の盛衰はもとより、社会生活上の様々な問題、人生の運・不運、病氣と医療等々のあらゆる問題が神秘的・宗教的意味をもつものとして了解されており、それ故に、この意味に相応した対応がなされたのである。⁽¹⁾七世紀末に始まり、六世紀にかけて高まった政治的・經濟的危機に關しても、対応の仕方は同様であつた。

この點に關してJ・P・ヴェルナンは次のように述べている。

われわれはこの騷擾と内紛の時期の經濟的条件の一部を認知することができる。宗教的・道德的分野においてはギリシャ人は、この危機を、彼等の既存の価値体系すべてを動揺させ、世界秩序そのものを攪乱する、罪と汚れの状態として感得したのである。

この危機の帰結は、法と社会生活の領域において、エピメニデスのごとき汚れを淨める予言者、ソロンのごとき立法者、ピッタコスのごときアイシユムネテス、ペリアンドロスのごとき僭主等さまざまな人物を含むいわゆる賢人たちの業積とされる改革であり、また知的領域においては新しいギリシャ倫理の結構を描き、その基礎概念を練り上げるための努力である。⁽²⁾

賢人達は、ヴェルナンが指摘しているように、七世紀末に始まったこの危機を「罪と汚れの状態」として感得し

た上で、それ相応の対応をしようとしたのである。^{*}

※その古典的な例がエビメニデスであろう。ソロンの招きによって前五九六年にアテナイに來たエビメニデスは、前六三〇年頃に起きたキュロンの殺害によって市が蒙った汚れを浄め、疫病を終熄させたと伝えられている。

政情不安・社会不安が「罪と汚れの状態」と解され、それが更に「流血」という事態に結びつけられるのは、ごく一般的であった。例えば、ソボクレス『オイディプス王』においても、テバイをおそった災厄は「ひとつの汚れ」によるものと解され、それがライオス王の殺害に結びつけられている。

勿論このような対応が、現実の危機に対して常に有効であったとは限らない。例えば、ソロンは優れた才能を買われてアテナイのために法を制定したけれども、彼の法律は、結果的には貴族と平民のいずれも満足させることが出来なかった。僭主として活躍した賢人も、没落貴族の不満をしずめることは出来なかった。超人的な能力を駆使することの出来た賢人も大同小異であったに違いないのである。にもかかわらず、このような対応をしたことで彼等は賢人と称されるようになった。当時の状況の中で、人々が彼等をそう評価したのである。つまり、彼等の知恵の卓越性を判定してこれを後世に伝えたのは世間の人々なのである。

七賢人は、この半世紀後に再び大きくクローズ・アップされた。彼等の名声が不動のものとなったのは彼等の存命時よりもむしろこの時代においてであったと言つてよい。七賢人の時代はもとより、それ以後もギリシャ各地の政治情勢は概して不安定であった。貴族政治に代わるべき都市国家体制はまだ生まれず、政争・党争がくり返されていたが、これに加えてイオニア地方では前五四〇年頃から東方の大帝国ペルシャの圧力が本格化してくることで、

政治情勢はますます流動的なものになっていた。七賢人がクローズ・アップされたのは、まさにこのような時代においてであった。このような時代情況の中で、かつての七賢人の時代がある時期に特定され、更に、人口に膾炙した賢人達の逸話、箴言、金句、その他雑多なものに創作的な要素が加わって、今日に伝えられているような賢人伝説ができ上がったと考えてよいであろう。当時の人々は、自らの知力によってこの時代の危機を乗り切っていくような人物の出現を希求していたのである。

(II) 知の表現

賢人達の知は一体どのような形で表現されているであろうか。彼らのどんな言動が、どんな脈絡において人々に深い感銘を与えたのであろうか。^{*}

※彼らは確かに政治手腕という点で実力を発揮し、歴史に名を留めた者が多かった。しかし彼らの活動分野は、実際にはそれぞれ異なっている。彼らは、政治手腕だけでなく、立法の才、実用的な知識、天文学、神意の了解、平穏な生活等々の分野でもそれぞれに卓越性を発揮しているからである。それ故、どのような共通分野で彼らが^{ソクラテス}知者であったのかを特定することは困難である。彼らの知的卓越性について考えようとする場合には、このような分野・領域にとらわれない次元で、その卓越性が何であったのかを考えていかねばならない。

『プロタゴラス』に登場するソクラテスの言葉は、この点について重要な示唆を与えてくれる。ソクラテスはこ

こでスパルタ人達の場合を例として取り上げ、スパルタ人達は戦闘や勇氣という点においてのみギリシャ人達にまさっていると一般に思われているが、彼等が「知恵の愛好」と「言論」に関して最高の教育を受けていることは次のような事実から明らかなだと指摘する。

「すなわち、諸君の誰でも、スパルタ人のなかで最も取るにたらぬ人物を選んで、その人につき合おうとしてごらんさい。ひとはその人物が、はじめは一般に、言論において、ある凡庸な資質しか示さないのを見出すでしょう。しかしやがて、論議のすすむうちに機会がくると、彼はあたかも投槍の達人のように、突如はっとするような、短く圧縮された言葉を投ずるのでありまして、たぐひに對話の相手がたは、童児と何ら異なるところのないような観を呈するにいたるのであります」⁽⁴⁾

これに続けてソクラテスは、「まさにこのことに気づいてスパルタ主義とは本来、体育の愛好よりは、むしろはるかに知恵の愛好にあるのだという事実を看破した人々」としてタレス以下七賢人の名前をあげ、彼等はいずれもそろってスパルタ人の教養の崇拜者であり、熱愛者であり、かつその弟子であったが故に「ひとは彼ら（七賢人）の知恵というのがはかならぬ上述のごとき性格のもの、つまり、それぞれによって語られた短い、肝に銘じるような寸言であることを、よく知ることができよう」と主張するのである。

スパルタ風の寸言がどのような脈絡の中で発せられているかという点に関しては、プルタークがスパルタ人達の言葉使用の実例について伝えている部分が注目に価する。プルタークは、スパルタでは子供の頃から「甘美をまじえた辛辣な言葉」と「短い言葉から汲まれる深い観察を持つ言葉」を使うように教えられるので「私も、スパルタ

人の言葉は短いように見えても立派に事柄の要点を突き、聞くものの心に触れるのだと考える」と述べた後で次のような具体例をあげているからである。

(一)王のレオニダスは、ある人がなかなか重大な事柄について述べたけれども時機を失していたので「せっかくだがあなたは大事なことを大事な時に言わなかった」と言った……。

(二)デ馬拉トスは、時機を失した質問で自分を悩ます厭な奴が、度々あの「誰がスパルタで一番偉いか」という質問をした時、「お前に一番似ていない人だ」と言った。ある人がエリスの人々はオリンピックアの競技を立派に正しく行なったと言ってほめた時、アギスは「エリスの人が五年に一日正義を行なったところで何の偉いことがあろう」と言った。パウサニアスの息子プレイストナクスは、アテナイのある弁論家がスパルタ人を無学だと言った時に「あなたの言う通りだ。ギリシャ人の中であなた方の所から悪いことを教わらなかったのは我々だけだ」と言った……。

(三)ナイチンゲールの鳴き声をまねる人がいるから聞きにこないかと誘われた人が「本物を聞いたことがある」と言った。ある若者は、死ぬまで戦う雄鶏をやろうと約束した人に「いや。殺すまで戦うのをくれ」と言った……⁽⁶⁾。

「スパルタ風の寸言」は、具体的には以上のような脈絡の中で発せられているのである。これらの言葉を投げ返された人は、一瞬虚をつかれたような感じがし、発言を封じられたかのような状態に陥ってしまう。このような言葉が発した人の内には、ある種の知が秘められているに違いない——人々はそう感じたことであろう。

これらの言葉全体をプルタークは、(一)冗長な言葉を非難する格言 (二)辛辣にして甘美な言葉 (三)何等かの形で省察に値するような意味をもつ言葉 に分類しているが、このような分類に則して言えば、最も深い意味を感じさせるのは第三のものである。ただ残念ながらプルタークは、辛辣ではあるが気のきいた面白い例ばかりを紹介しているもので、それから十分に深い意味を感じ取ることは出来ない。^{*}

※他のものと比較した場合、この第三のものは、七賢人の格言——例えば、「汝みずから知れ」「分を超えるなかれ」等々——に対して最も近い距離に在り、『プロタゴラス』に登場するソクラテスの見方に従うならば、この第三のものが洗練されていて七賢人の格言なるものが定着し、これが後世に伝えられたのだと考えてよいであろう。かつてG・グロートは、七賢人の格言とは哲学の初期的な表明であると述べた。History of Greece. VOL IV p. 129 London 1847. だがB・スネルは、これらの格言を哲学の表明とは見なししていない。

勿論、七賢人はスパルタ人に限られていたわけではない。学説誌家であるマケドニアのストバイオスの詞華集には、七賢人の格言が数多く収録されているが、その中で、常に七賢人のメンバーに数えられているソロン、タレス、ピタコス、ビアスのものを次に見てみよう。

アテナイ人ソロンは言った。1、極端を慎め。……3、苦痛を生む快樂をさけよ。……9、友人を急いで作るな。しかし誰かを友人にしたら、急いで退けるな。……10、支配されることを学ぶことによって、支配することを知らるだろう。……12、市民たちには最も快いことではなくて、最も善いことを忠告せよ。……19、眼に見えぬものを、眼に見えるものによって推量せよ。

ミトレスの人タレスは言った。1、保証、それと一緒に身の破滅。……4、いやしい仕方金持になつてはならぬ。……8、君が親たちに致すような孝養を、君自身が年寄りになつた時に、子供たちから期待せよ。……11、無為は苦しみ。……12、放埒は有害なもの。……13、無教養は重荷。……17、憐れむよりも、むしろ羨め。……18、節度を保て。

レスボスの人ピタコスは言った。1、好機を知れ。……2、汝がなそうとしていることを語るな、失敗すれば、笑われようから。……12、汝のものを獲得せよ。

ブリエネの人ピアスは言った。1、大多数の人間は悪い。……14、無理強ひしてではなく、承知させた上で取れ。……15、何でも君が善いことをしたら、それは神のせいにして、自分のせいにするな。⁽⁶⁾

格言の内容は、金銭、健康、幸福、政治、善悪、交友、生活信条等々、多方面にわたっているが、全体的に見てみると、これらは実生活に有用な諸教訓という色あいが強い。農耕中心の自給的な生活から貨幣経済へと変貌をとげていく前六世紀初頭の時代には、これらはまさに実生活に役立つ指針となり得たはずである。

この点に関してスネルは、初期アルカイック期に活躍した七賢人は、道徳を説くというよりはむしろ「有用なものに対する健全な感覚」に訴えているのであり、これらの格言に示されている洞察は、何よりも「生業に際して働く実際の思慮」という冷静な立場に立って得られていると指摘している。つまり「人間が自分の力を信頼し、これを自己の利益に向けることを学べば学ぶほど、人間はますます自分の打算、計画、予想に関心をもたざるを得なかった」のであり、賢人達の格言はこのような関心を色濃く反映したものであったと言うのである。スネルは更に

「内面的」「精神的」な幸福というものを未だ知らない時代には、「幸福」と「有用なもの」とは相接していたと述べて、七賢人の示した知の中身が「間違いなく行動するための知識」すなわち、「幸福」＝「有用なもの」を追求する「能力」であったと結論している。⁽¹⁾

しかしながらたとえそれが「間違いなく行動するための知識」であったとしても、これらの格言は、ただそれだけでは人々に深い感銘を与えるはずがない。重要なのはこれらが一体どのような脈絡の中で語られていたかである。勿論これには実に様々なケースがあるわけであるが、その一例としてソロンとクロイソスの場合を見てみよう。

ヘロドトスは、アテナイの賢人ソロンに関して次のようなエピソードを伝えている。

多くの民族を征服して自らの支配下に置き、比類なき富と権勢を得、我こそはこの世で最も幸福な人間であると自負しているリュデアの王クロイソスのところへ、ある日ソロンがやってくる。クロイソスは彼にむかって、「あなたは誰かこの世界で一番仕合せな人間に遭われたかどうか」と問いかける。先ず第一番目に自分の名があげられるに違いないと心待ちしているクロイソスに、ソロンは順次別人の名をあげていくのである。王位にあるこの自分を、仕合せな人間と思っ^てはくれないのかといぶかるクロイソスに、ソロンは次のように説くのである。

「クロイソス王よ、あなたは私に人間の運命ということについてお訊ねでございますが、私は神と申すものが嫉み深く、人間を困らすことのお好きなのをよく承知いたしております。

あなたが莫大な富をお持ちになり、多数の民を統^づべる王であらせられることは、私にもよく判っております。しかしながら、今お訊ねのことについては、あなたが結構な御生涯を終えられたことを承知いたします。

では、私としましてはまだ何も申し上げられません。

人間死ぬまでは、幸運な人とは呼んでも幸福な人と申すのは差控えねばなりません。

人間の身としてすべてを具足することはできぬことでございます。……できるだけ事欠くものが少なくて過すことができ、その上結構な死に方のできた人、王よ、さような人こそ幸福の名をもって呼ばれて然るべき人間と私は考えるのでございます。⁽¹⁾」

クロイソスはソロンの言葉が気にいらず、一顧も与えずに彼を立ち去らせた。その後クロイソスは、かつて命を助けてやったことのある男に息子の一人を殺されるという悲運にみまわれる。更にその数年後、クロイソスは神託の解釈を誤ってペルシャと戦い、リュディアを滅亡へと導いてしまう。ペルシャ軍に捉えられ、火刊に処せられるべく薪の上に立たされた時、クロイソスは「人間は生きている限り、なにびとも幸福であるとはいえない」というソロンの言葉が如何に靈感に満ちた言葉であるかに思い至り、深い溜め息をもらし、悲しみの声をあげて三度までソロンの名を呼んだとヘロドトスは伝えている。^{*}

ヘロドトス『歴史』一卷 三〇―八七 松平千秋訳 岩波

ソロンとクロイソスのこのような会話は、史実だと考えない方がよいであろう。ソロンの立法は前五九四年頃と推定されるが、クロイソスの即位はそれから三十数年後の前五六〇年かあるいは更にそれ以降のことだからである。そのためかヘロドトスは、これを「また聞き」の形で紹介している。しかしブルタークは、年代から察してこれは作り事だとする人々もあるが、これが「ソロンの性格にかなない、かつこの人の気位や知恵にふさわしい話」であるから、年代にあわないという理由で棄てるのはよくないと述べている。

この例にも示されているように、賢人達の多くが将来を見通すような意見を述べたり政策を提言したりし、それらが後になって高く評価されている諸例を念頭において考えてみると、これらの格言が人々に深い感銘を与えたのは、格言が示されてから少なくともある程度後の時点においてであったと解するべきであろう。というのは、賢人達の格言がよしんば「有用なもの」に関する知であったとしても、それらは「罪」や「汚れ」といった神秘的諸觀念になじんでいた人々にストレートに受け入れられなかったであろうし、たとえ受け入れられたとしても、それらが直ちに深い感銘を人々に与えることはむづかしかったに違いないからである。実際には、ソロンとクロイソスのエピソードの場合のように、大きな不幸・不運に打ちのめされてはじめてこれらの格言の真価がわかるというケースが大部分だったことと思われる。このような時間的脈絡を経てはじめて人々は、これらの格言がいかにすぐれた知の表現であるかを思い知ることになるのである。

このように、賢人達の格言には、瞬時にして人々に衝激を与え、人々を沈黙させてしまう場合から、ある程度の日時を経た後で人々に深い感銘を与える場合まで、相当の幅があったのである。

七賢人の知的卓越性を示す格言は、まさにこのような脈絡の中で発せられているのである。

(Ⅲ) 価値超越の知

賢人達の格言に秘められた知の実体、その卓越性の実体とはどのようなものであろうか。

格言（寸言）が発せられ、それが人々に衝激や感銘をひきおこす脈絡を考えた場合、まず注目されるのは、賢人達と人々との間に価値観の落差があるという点である。つまり人々がある種の見解（意見・立場・判断など）を表現するとき、格言はそれを越えるような価値観を示唆し、そのことによって先の見解の致命的な欠陥を露呈させるような働きをしているのである。

例えば先のエピソードに示されているソロンの言葉を、ヘロドトスは「人間は生きている限り、なにびとも幸福であるとはいえない」と要約し、プルタークは「人生は終末を見なければいけない」と要約しているが、このような格言に凝縮された価値観と、富と権勢に酔いしれているクロイソスとの間には、幸福観という点で大きな価値の落差がある。この落差をヘロドトスは更に次のように説明する。

クロイソスは確かに神を敬い、様々の品をデルポイに奉納した。また彼は、デルポイの神託の正しさを実際に確かめ、戦争の成り行きについての神託を求め、これに従ってペルシャと戦った。だがクロイソスがリュディア帝国を滅亡させてしまったのは、神託解釈の失敗もさることながら、究極的には祖先の犯した罪を、彼が償ったということにすぎない。クロイソスの五代前の祖先であるギュゲスが、彼の当時の主君カンダウレスを暗殺して王位に就いた時、デルポイのピュティアはギュゲスの罪が五代後の人によって償われるべきことを予言したが、リュディアの国民もその歴代の王も、この託宣が実現するまではそれを気にもとめなかった。

ヘロドトスのこの説明によると、クロイソスが破滅した究極の原因は必然の運命にあったとされている。オイディプスが受難の運命を避けられなかったように、神々が人間に定め与えた運命は抗しい難い巧妙な力で人間達を

導いていく。けれどもクロイソスは、自分の運命が破滅に向っているということを知らなかったし、その運命から逃がれることはできないということも知らなかった。ほとんどの人間は、この点に関して無知なのである。

しかし、ソロンは、人間の運命というものについてよく承知していた。神々は、思いあがり調子にのりすぎて神々のわきまを奪うような振舞いに出る人間を、あるいは幸運にめぐまれ成功しすぎて申し分のない人間をねたみ、ひそかに破滅の罟をしかけるのである。たとえその人間が首尾よくそのような悲惨な目にあわないう一生を終えたとしても、彼が一度犯した過ちは、クロイソスの場合のように、子孫がこれを償っていかねばならない。ソロンはこのことをよく承知していた。だからこそ彼は、次のようにうたったのである。

ゼウスはかく報復す。死すべき輩とは異なり、

何事につけ直ちに怒りを燃やすにはあらず。

罪深き心持つ者ゼウスを逃れることなく、

遂にはその罪白日の下にさらさる。

今償う者もあり、後に償う者もあり。

神の怒りを避ける者もやがて復讐さるるは必定。

無実なる後継ぎ罰せらる。子供らと孫らを問わず。⁽⁴⁾

このような運命の定めを自覚し、一切を神々の御手にゆだねながら驕らず高ぶらずに生きるのが幸福か、あるいは運命を切り開き、危険に立ち向って願望を実現させるのが幸福か、ここに大きな価値観の落差があるのである。

クロイソスは、ソロンとの会見の時にはこの落差に気づかなかった。火刑に処せられるべく薪の上に立たされた時、彼ははじめてソロンの知にふれる。この時ソロンの残した言葉がいかに「靈感に満ちた言葉」であったかに思い至ったクロイソスは強い衝激を受ける。そして深い溜め息をもらし三度ソロンの名を呼んだクロイソスの内面には、この落差を一举に克服する価値超越という事態が生まれるのである。これまで是としてきた幸福観が超克され、異質な幸福観の世界が開かれてくるからである。

このような価値超越は、格言を通して賢人達の知にふれた幾多の人々におこり得たことであろう。勿論賢人達にあこがれた人々は、一昔前の危機の時代を乗り切った彼らのたくましい手腕や才覚にあこがれ、そのような事態の再現を願っていたかも知れない。だが賢人達の残した格言の多くは、人々が「有用なもの」を求めるときには本当に有用なものとは何かという疑問を、また、人々が幸福を求めるときには本当の幸福とは何かという疑問を人々に投げ返すのである。格言はこのような形で価値観の落差を示唆し、より高い価値空間を摸索させ、そこへ超越するように人々を促してやまないのである。

結 語

賢人達がこれらの寸言や格言を通して示した知は、ある時代のある特定の課題に対応しているだけのものではない。その知には時代の制約を超えて生き続ける普遍的な要素がある。彼らの知の実体は、その知にふれた人に更に

一層高度な価値空間を摸索させ、不断にそこへの超越を促す点にあるのである。その意味でこれを、価値超越の知と呼ぶことができよう。

注

- (1) Solon, Fr 15 Loeb C. L. に於て
- (2) このように、賢人達が危機への対応において示した知には実際の・合理的側面と宗教的・神秘的側面という二面がある。なぜこのような二面が生じたのであろうか。レヴィ・ブリュルならば「人間精神の知的発展がどのようなものであろうとも、その中には原始心性のなごりがある」という視点からこれを説明するであろう。事実、古代ギリシヤ人は、パウラの指摘するように、神々の世界と人間の世界の一体性を信じていたので、自分達を取りまいている事物がそのような二面性をもっているということをごくあたり前のこととして受けとめていたのである。C. M. Bowra, THE GREEK EXPERIENCE London, 1957
- (3) J.P. Vernant, LES ORIGINES DE LA PENSEE GRECQUE Paris, 1962 吉田敦彦訳『ギリシヤ思想の起原』みすず 七〇頁
- (4) Plotagoras, 342 D-E
- (5) 『フルターク英雄伝』(二二二—二三三頁)河野与一訳 岩波
- (6) D.K. 10 A 3 (Stob. Flor) 山本光雄『初期ギリシヤ哲学者断片集』岩波
- (7) B. Snell, Die Entdeckung des Geistes. Hamburg 1955 新井靖一訳『精神の発見』三〇—三〇七頁 創文社
- (8) Solon, Fr. 2